

非行少年と愛

高橋 早希

- 1 はじめに
- 2 非行少年に見られる特徴
- 3 トラヴィス・ハーシーの社会的絆理論
- 4 非行少年と社会的絆の弱さ
- 5 認知機能トレーニングと「愛」の回復
- 6 愛と再非行防止の抑止力
- 7 おわりに

1 はじめに

非行少年と聞くと、「問題を繰り返す存在」、「更生が難しい」といった否定的なイメージを持つ人が多いと感じる。しかし、そのような行動の背景には、本人の意志や性格だけでは説明できない要因が存在している。本レポートでは、非行少年の再非行防止において「愛」が果たす役割に注目し、その重要性について考察する。

また、私は昨年度「非行少年と食」というテーマで研究を行い、生活習慣や食事環境が非行少年の心身に与える影響について検討した。その中で、食事は非行少年にとって生きるための「物質的な基盤」であると感じた。そこで今年は、その対となる「精神的な基盤」としての愛に焦点を当てる。本レポートでは、非行少年の特徴を整理した上で、トラヴィス・ハーシーの社会的絆理論を用いながら、愛がどのように再非行防止の抑止力となり得るのかを明らかにする。

2 非行少年に見られる特徴

非行少年の特徴については、宮口幸治氏の著者『ケーキの切れない非行少年たち』に述べられている。宮口氏は、非行少年に共通する特徴として、認知機能の弱さ、感情統制の弱さ、不適切な自己評価を挙げている¹。

認知機能とは、物事を見たり聞いたりしながら理解・判断・想像する力であり、空間把握や因果関係の理解、感情の制御など、対人関係を築く上で不可欠な能力である。例えば、丸いホールケーキを三人で公平に分けるという課題において、中心から放射状に切ることができない少年が多く見られたという事例は、認知機能の未熟さを象徴している。

また、感情統制が弱いことで怒りや不安を溜め込み、それを適切に表出できず、暴力や逸脱行動に結びつけてしまう例も少なくない。さらに、過去の虐待やいじめ経験などにより、被害的な思考パターンを形成し、他者を信頼することが困難になっているケースも多い。

これらの特徴が重なることで、非行少年は自尊心が低下し、健全な対人関係を築くことが難しくなっていると考えられる。

¹ 宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』（新潮社、2016年）第1章

3 トラヴィス・ハーシーの社会的絆理論

本レポートでは、非行少年と愛が関係あるかの理論として、トラヴィス・ハーシーの社会的絆理論を用いる²。ハーシーは「なぜ人は犯罪するのか」ではなく、「なぜ人は犯罪をしないのか」という問いから理論を構築した。

ハーシーによれば、人が非行や犯罪を抑制するのは、社会との間に「社会的絆」が存在するからである。この社会的絆は、愛着・投資・巻き込み・信念の4つから構成されると述べている。

特に重要なのが「愛着」であると考ええる。愛着とは、親や教師、周囲の大人など、自分にとって大切な他者との情緒的な繋がりを指す。この愛着が強いほど、「その人を悲しませたくない」「期待を裏切りたくない」という気持ちが生まれ、非行に対する抑止力となる。しかし、非行少年の多くは家庭内で十分な愛情を受けられなかった経験や、対人関係における否定的体験を重ねてきたことから、安定した愛着を形成できていない場合が多い。その結果、他者を信頼することが難しくなり、非行行動に歯止めがかからなくなると考えられる。

投資とは、将来に向けて積み重ねてきた努力や、失いたくないものの存在を意味する。進学や就職、資格取得など、将来への展望があるほど、非行によってそれらを失うリスクを意識するようになり、逸脱行動を控えるようになる。一方、非行少年の中には、将来への希薄や役割意識を持てず、「失うものがない」と感じている者も少なくない。このような状況では投資が弱く、非行に対する抑止力も働きにくくなる。

巻き込みとは、勉強や仕事、部活動など社会的に望ましい活動にどれだけ時間を使っているかを指す。ハーシーは、正当な活動に多く関与している人ほど、非行を行う時間的余裕がなくなると考えた。少年院や更生施設において、日課や役割を与えることが行動の安定に繋がるのは巻き込まれているからであると考えられる。

信念とは、社会の規範やルールを「守るべきもの」としているかどうかである。信念が形成されていない場合、ルールは単なる外的な強制として受け取られ、違反への抵抗感が弱くなる。信頼できる大人との関係の中でルールの意味を理解し、納得する経験を重ねることで、信念は内面化されていくと考えられる。

4 非行少年と社会的絆の弱さ

一般高校生と非行少年の信頼感に影響を及ぼす経験要因の論文によると、非行少年は一般高校生と比べて、他者への信頼感が低く、親への愛着も弱い傾向があることが示されている³。その代わりに、友人への依存が強くなる場合が多いが、その友人が逸脱的な仲間である場合、再非行のリスクは高まる。

これは、ハーシーの理論でいう「愛着の対象」が健全でない状態にあるといえる。親や教師といった社会的に望ましい他者との愛着が形成されないまま、逸脱的な仲間との関係に

² 『Causes of Delinquency』 [Csuses Of Delinquency](#) (2026年1月29日閲覧)

³ 天貝由美子「一般高校生と非行少年の信頼感に影響を及ぼす経験要因」116-117頁
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjep1953/47/2/47_229/_pdf/-char/ja

依存してしまうことで、非行が強化されてしまうのである。また、社会的絆の要素である「投資」や「関与」が弱いことも、非行少年の特徴として挙げられる。将来への期待や役割意識を持ってない状態では、失うものが少なく、非行に対する抑止力が働きにくい。

5 認知機能トレーニングと「愛」の回復

宮口幸治氏は、医療少年院などにおいて、非行少年の立ち直りを支援する方法として「認知機能トレーニング（コグトレ）」を実践している⁴。コグトレとは、認知機能の弱さを背景に持つ子どもたちに対し、思考の整理や感情の理解を促すことを目的とした支援方法である。

その一例として「感情のペットボトル」という取り組みがある。これは、怒りや悲しみといった感情を水の量で表現したペットボトルを袋に入れて担がせることで、感情を溜め込むことの重さやしんどさを身体的に体感させるものである。この体験を通して、少年たちは「感情を表に出さずに抱え込むことは苦しいことだ」ということを理解し、自分の感情に気づききっかけを得る。

また、コグトレ棒を用いたトレーニングでは、記憶・理解・判断・運動を同時に使う課題に取り組む。これにより、集中力や衝動を抑える力が養われ、感情に振り回されずに行動を選択する力が育まれるとされている。

これらのトレーニングの重要な点は、正解・不正解を一方的に評価するのではなく、「できたこと」を認め、言語化し、共有する過程にある。自分の努力を受け止めてもらえる経験は、非行少年にとって希少な「信頼される経験」となり、他者との関係性を築く土台となる。

このように、コグトレは単なる認知機能の改善にとどまらず、他者との関わりの中で自分の存在を肯定的に捉え直す機会を提供している点で、ハーシーの社会的絆理論における「愛着」や「投資」の回復につながる実践であると考えられる。

6 愛と再非行防止の抑止力

以上のことから、非行少年にとっての「愛」とは、単なる恋愛や家族愛ではなく、「自分が受け入れられている」「信頼されている」と感じられる関係性そのものであるといえる。このような関係性は、ハーシーの社会的絆理論における愛着の根幹をなすものであり、再非行防止における重要な抑止力となる。

少年院や更生保護施設において、信頼できる大人との出会いや役割付与を通じて変化していく少年が多い⁵という事実は、社会的絆の回復が行動変容に繋がることを示している。

⁴ 宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』（新潮社、2016年）第4章

⁵ 宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』（新潮社、2016年）第5章

7 おわりに

本レポートでは、非行少年にとって愛が再非行防止の抑止力になり得ることを、トラヴィス・ハーシーの社会的絆理論を用いて考察した。非行少年に本当に必要なことは罰を与えることではなく、社会との健全な絆を結び直す機会ではないかと考える。

また、「愛される経験」を通じて、自分には価値があると感じられるようになることこそが、非行少年の立ち直りを支える最大の力である。誰かに信じてもらえる社会を育てていくことが、再非行防止に向けた重要な課題であると考ええる。